

---

# ほら穴の彼

守水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ほら穴の彼

### 【Nコード】

N8323P

### 【作者名】

守水

### 【あらすじ】

町のはずれにある立ち入り禁止のほら穴には、いつからか浮浪者が住み着いていると噂が流れていた。その真偽を確かめようとしたれいは、そこで一人の男と出会った……

## 第一話

「れい」

「ん、何？」

自分の名を呼ばれて、ちょうど玄関から出るところだったその少女は、反射的に振り返った。長い髪が、少しだけ揺れる。

「大丈夫だとは思ってるが、あそこには近づくんじゃないぞ」

「……わかってるって」

父に、れいは苦笑混じりで返事をした。

「大体あんなところに用なんかないよ。それに噂にすぎないんだし。誰も見に行ったことないんでしょ？」

「だけど、用心は、しろ」

柄にもなく一字一句強めて言う父に、れいは目を丸くした。れいが一人娘だということもあるだろうが、それにしても珍しいことだ。そんな父に抑えきれなくなった笑い声を漏らしながら、れいは外に出た。

「れい！ あそこには行くなよ！」

戸が閉まる前、この父の声のあとに、ため息が聞こえた。

「あ、こんにちは、れいちゃん」

「おばさん、こんにちはー。あ、その箱の整理やつておきますよ？」

「じゃあお願いできる？ 最近ばけてきたんだか、どこに何を置いたのか忘れるのが多くて」

店に入ったとき、ちょうど店長の松木が大きなダンボールを抱えて、店の奥に持っていきこうとするとところだった。れいが声をかけたため、松木はゆっくりとそれを床に置いた。

「おばさん、謙遜しすぎ。ちょっと待っててください、今着替えてくるんで」

レジ側にある店員用の扉を開け、自分のロッカーに荷物を詰めたあと、れいはこのコンビニのエプロンをつけた。

「じゃ、かたづけてきますね。そういえば、今日はお客さん来ましたか？」

ダンボール箱を持ち上げながら、れいは松木に尋ねた。

「ううん、今日はまだ」

「そうですか。まあ、時季が時季ですしね」

「言えてる。これから夏になるからね。そしたら忙しくなるよ」

少し脅かすように答えた松木に、れいはくすりと笑みをこぼした。そしてしっかりと箱を持ち直すと、レジとは反対側にある飲み物売り場の、やはり店員用のドアへと歩いた。

今は五月も終わりに近い時期だ。このコンビニには少し変わっていて、普通のコンビニにはないものが売ってある。例をあげると、懐中電灯、板チョコのような、割って使う小型の炭など。虫除けスプレーも完備してある。

それというのも、この近くには大きなキャンプ場があるからだ。キャンプ場と名がついているわけではないが、それ相応の広さの広場がある。湖畔にあるその広場は、毎年夏には色とりどりのテントで埋め尽くされるのだ。そのキャンプに来た人たちのために、このコンビニにはキャンプに使えるものを置いている。時期が近くなれば、花火セットも入れる予定だ。

「よいしょっと……。暇なものもある意味大変だけど、いっぱい人来るほうがもつと大変だろうなあ」

箱の中から商品を出し、種類別に棚に置いていく。今はさっぱり売れないが、もう少しでこの棚はがらんどろになるだろう。

その後も、表に出ている商品の整理や、レジも少しやった。近所の人々が数人来たのだ。だが近所なので、炭や懐中電灯など、大きいものは買わない。それでも、れいは嬉しかった。

「れいちゃん、今日はもう帰ってもいいよ」

コンビニに来て、まだ三時間ほどだ。れいが来たのは一時ごろ。

なので、四時を過ぎたばかりだ。突然の松木の声に、れいは驚きを隠せなかった。

「え？ だって、あたしいつも六時まで……」

「まあそうだけどね。だってこんな風に人來ないんじゃないよ、つまらないでしょ？ それにれいちゃん、そろそろテストでしょ」

「まあ、それはそうですね……」

この辺りはあまり人が住んでないので、かなり個人的なことも広まってしまふ。もちろんその大半は、悪い事ではないが。

「人が来る時期なら別だけど、この状態じゃあ、働きにもなんないよ。今日はもう切り上げていいよ。どうせ六時までいたって同じことだし。休むのもよし、勉強するもよし。大丈夫、バイト代は下げないから」

「え！？ いえ、あの、バイト代が心配なわけじゃ………。そつ、それにだめですよ働いてないのに！ バイト代下げてもらったつてかまいませんから！」

「またまた、れいちゃんの悪い癖。人の好意はもらっとくもんだよ。さ、いいから今日は帰りなさい。その代わりに、花火が入る頃にはうんと働いてもらうから」

「……あ、そういうことでしたら……。そ、それじゃあ今日は失礼します」

今回の休暇が有給という形ではないと解釈して、れいは安心した。彼女の性格上、そういったことには敏感なのだ。

手早く着替えを済ませ、れいは松木にあいさつをすると、コンビニを後にした。日が長くなっているため、まだ太陽は夕日には程遠い。ふと、れいは自分がコンビニに来た道とは反対側の、岩壁を見た。

はるか上空までそびえる岩壁は、この近くの山々の一部だろう。道が開けているとはいえ、ここ一帯が山沿いであることに変わりはない。その岩壁のところどころに、大きな穴が開いている。最初、れいは防空壕かと思ったが、こんな山奥まで空襲が来るだろうか、

という考えが浮かび、防空壕案は消えた。なら、やはり自然に開いたものなのだろうか。それともずっと昔、あの岩壁から何か採れていたのか。どちらにしろ、あの穴全てには、立ち入り禁止のテープが貼られている。

その岩壁の奥には、目を見張るような豪邸が、なぜかある。大富豪の家なのは間違いないが、なぜこんなへんぴな所に建てるのか、れいにはわからなかった。街で成功した企業の社長だとか、そういう話は聞いた事があるが。

「……でもまあ、覗くぐらいなら怒られないよね」

自身に言い聞かせるように呟くと、れいは穴へと足を運んだ。豪邸を覗く気など毛頭もない。この辺りに民家は少なく、車道があるぐらいだ。その車道だって、一日に通る車の数はたかが知れている。それでもれいが、少し人目を気にしたのは、立ち入り禁止だということもあるが、実はその穴が、れいの父が言っていた“あそこ”なのだ。

「大体さ」

手入れされていない茂みを大またで歩きながら、れいはひとりこちた。

「誰も見て、ないんだったら、いないのと同じ、じゃんか。でも、やっぱり自分の目で、確かめないと、もやもやしていやだからなあ……」

れいは、おかしなところで探究心が湧く少女だった。

「ふうっ……。どの穴なのかな、浮浪者がいるっていうの……」  
穴に入れないよう、「立入禁止」のテープが、穴をふさぐように十字に貼ってある。それは全ての穴に施されていた。れいははじから順に見ていったが、見ただけで何かがわかるというわけではない。  
「手がかりもなんにもありません……。……ん？」

ふと、木のかげに隠れるようにある穴に、目がいった。縦二メートル、横も二メートルほどといったところか。そこにももちろんテープが貼ってあったが、そのテープが少しよじれているのだ。何か

をひっつけたか、一度テープの端を外して、粘着部分がくっついてしまつて、無理やりはがしたような。それには、他の場所のテープにはある、真新しさがなかった。

「……本当なのかな」

れいの心に、わずかな恐怖が生まれた。

ここまでできて、れいが引き返すはずがない。身をかがめると、彼女はテープの下の隙間から、穴の中に侵入した。

「うっわ、真っ暗……。懐中電灯持って来ればよかった」

意外と、外からの光は奥には届いていなかった。数歩進むと、そこは闇だ。足を上げずに、滑らせるようにしてゆつくりと歩く。

真正面を向いていた目に、何かぼんやりとしたものが見えたような気がした。その時だった。

「きゃ、あー！」

突如、足場が消えた。いや、そこは小さな崖になつていたので。全て黒で塗りつぶされていたため、全くわからなかった。

「いつ！……たあ………」

高さはそんなになかったようで、すぐにれいはしりもちをつくことになった。それでも予期せぬできごとに、痛みは光のある場所にいるときよりじわじわ伝わり、心臓も忙しく動いている。そんなれいに追い討ちをかけるように、声がした。

「誰だ」

「っ！」

れいは悲鳴をあげたが、それは声にならなかった。引きつったような音だけが、のどを通過して口から漏れた。

「またお前らか？ 何を言われようと、俺はここから出ないからな。何やら相手は誤解しているらしい。多分れいを、この暗闇の住人をここから追い出そうとしている連中と、間違えているのだろう。」

「あ、あのっ……。あたし違います」

「……？ 女か。今度は色仕掛けか何かか？」

「っ……！ ち、違います！ あたしそういう者じゃありません！

偶然入ってきただけなんです！」

「偶然もくそもあるか。ここに俺がいるってことは、この辺に住んでいるんなら百も承知のはずだ」

明らかに相手は、さっさとれいに消えて欲しがっているようだった。

「そうですねど……。本当かどうか確かめたくて」

「好奇心か？ ならさっさと消える。言っておくが、俺はここでもここを退かんからな」

棘だらけの男の声だった。れいは少しショックを受けながらも、低い崖をよじ登った。上り終えてから、また後ろを振り返った。

「あ、あの！ 何か必要なものありますか？」

「消えろ」

必死の叫びも、情のない一言に一蹴された。れいは悲しげな目を暗闇に向け、早足で洞窟を出た。

## 第二話

「……すいませーん」

「？」

暗闇の中で、男は顔を上げた。しかしれいには何も見えない。とりあえず自分がいることを知らせて、れいは崖を降りた。

「あの……ここ、はしごかけてもいいですか？ いちいち登るの大変なんで」

「……………お前、ここに通う気か？」

馬鹿な女だとも言いたげな口調だった。

「本つ当に邪魔なら、やめますけど……………。だって大変でしょう？ 食料とかどうしてるんです？ お金あります？」

「食料なら十分すぎるほど持ち込んである」

「でもずつと住むんなら尽きるでしょう？ 何かあったら、買ってきますよ」

「浮浪者如きに金を出すのか？」

「浮浪者だからってわけじゃなくて、ただ心配なんです。何持つてるんですか？ 今は」

返事はなかった。いや、言葉による返事がなかっただけで、暗闇から物体が一つ、投げてよこされた。調度足元に落ちたそれを、れいは拾い上げて外からの光にかざした。

「え…………、か、カロリーメイ…………」

あまりの衝撃に、れいの言葉は急激に上がったかと思うと、一気に落ち込んだ。食べ続けると病気になる食品でも見たように、顔をしかめながら。

「持ち込んであるって…………、まさかこればかりですか？」

「馬鹿言え」

相変わらず跳ねつけるような調子だったが、れいはとりあえず安心した。

「俺がそのチーズ味だけ持ち込んでるとでも思ったか？ 他の味も全部あるから、十分なんだよ」

れいは、つい持っていた箱を取り落とした。この浮浪者、故意にボケているのか。

「あのですね……。ぜんっぜん十分じゃないです！ こんな栄養補助食品ばっか食べてたら、いくら男の人だからって持ちません！

買ってきてよかった」

「何をだ」

「食べ物に決まってるじゃないですか。おにぎりとサンドイッチ、それとお茶です。あ、見えないんで懐中電灯持っついていいですか？」

「……勝手にしろ」

飽きたようだったが、棘はなかった。れいは片手にコンビニ二袋、片手に小さめの懐中電灯を持つと、明かりをつけて奥に進んだ。十歩ほど進んだところで、足が見えた。ぼろぼろのスニーカーだ。その足を照らすように、れいは懐中電灯を地面に置き、しゃがんで袋をあさった。

「えっと……」

おにぎりを一つ取り出したところで、電灯を取って味を確認した。また同じ位置に戻して、れいは男に話しかけた。

「シーチキンマヨネーズ、食べられます？」

「味はなんでもいい」

またそっけない返事だった。れいは気にせず、包装をとって、まだ暗闇に染まる相手の胸元辺りに、腕を伸ばした。思いのほか、手の海苔の感触は、ゆっくりと消えた。

「お茶も開けますね」

海苔が噛み切られる歯切れのいい音が、洞窟に響いた。れいがペットボトルを開ける音も、妙に大きく聞こえた。

「えっと……」

開けたボトルをどこに置こうかと少し見回したとき、ふとボトル

が握られた。ついでその指もれいの手に触れたので、驚いて手を緩めた。指は少し冷たかった。

「み、見えるんですか？」

「とつくに暗闇に慣れているからな。放していい。見えないんだろ  
う」

「はい」

ボトルが地面に置かれる小さな音と一緒に、また海苔が裂かれる音もした。

「えーとあとは……、鮭ありますよ。あとサンドイッチはハムとレタスのやつと、あと……、あ、またシーチキンだ。よく見て買ってくればよかった……」

「おい」

「はい？」

れいはまた袋をあさっていたので、顔を上げて返事をした。相手は見えないので、声のしたほうを見て。

「お前、浮浪者の、しかも男のそばにいて怖くないのか？」

「いえ、別に……」

れいは、突き刺さる視線が男のものでなく、目の前に広がる黒そのものの視線であるような気がした。

「……でも、言われてみると少し怖いかもしれませんね」

男の言葉のおかげで急速に広がり始めた恐怖感を、れいは作り笑顔で己からも隠した。

「ふん」

その取ってつけたような笑みが、気に食わなかったらしい。一つ鼻で無愛想に笑うと、れいの足元を照らしていた光が消えた。

「あ」

れい自身飽きれるような、間の抜けた声だった。今まであった光が消えた直後が、一番見えにくくなる時だ。サンドイッチの包装を取ろうとしていたれいは、そのままの格好で動きを止めた。

「俗に言う浮浪者だったら、こうしたあと何をする？」

れいは答えなかった。自分が動けなくなったのではなく、周りの空気が、れいを包んだまま固まってしまったようだった。だがそれは、相手も同じようだった。自分のものでなく、相手の動く気配ぐらいあってもいいはずなのに、この空間はまったくの無音だ。

「……あの、あなたの立場がよけい悪くなります」

「うまく逃げたな」

男は、また鼻で笑った。それを合図に、再び明かりが灯った。

「わざわざ開けなくてもいい。俺は寝たきり患者じゃないんだ。そこに放っておけ」

「あ、そうですね。じゃあ、置いておきます」

コンビニの袋を男の足の近くに置くと、ばらばらに散らばった箱を、三、四個れいは拾った。

「それは俺の食料だぞ」

「でも、余計ですよ。少しはまともなもの食べてください。これは預かっておきますから」

「泥棒が」

「預かるって言ったじゃないですか」

男はあとは何も言わなかった。そのやりとりがれいは少しおもしろくて、笑顔になった。

### 第三話

「和風にイタリアンにゴマ、ありますけど、どれがいいですか？」

「そんなものどれでもいい」

「そういう性格はあまり好かれませんよ。ちゃんと選んでください」

「……ゴマ」

さっさとしろと言わんばかりの勢いに負けず、れいは言った。男はそれに呆れたように答える。

「サンドイッチに野菜あることはありますけど、少ないですからね。はい、どうぞ。割り箸割ってありますよ」

れいは、今回男のためにサラダを買ってきたのだ。初めて食べ物を渡しに、このほら穴に来るようになってから、もう二週間以上が経った。もちろん毎日通っているわけではないが、休日は必ず寄っている。

「ここに来るまで、見つかったりしないのか？」

「ありませんよ。車が増えるのはもう少し経ってからだし、人もあんまりいませんから」

答えてから、れいはふと気付いて男に質問した。

「あの、心配してるんですか？ あたしのこと」

「お前が入りしてるのが見つかったら、噂が本当だってばれて、ここを追われるかもしれないからな」

間髪入れず、跳ねつけるように男は言った。

「そ、うですね……。じゃあ、これからは今以上に気をつけて来ます！」

「……………」

黙りこんだ男から、れいは啞然としているような雰囲気を受けた。

「あの、どうしたんですか？」

「お前な、普通はもうやめるとか言うだろう。なんで逆に来たがるんだ？」

「だって、心配だからって言ったじゃないですか。あ、あれ全部食べました？ なくなってたなら、預かってた分少しお返ししますけど」  
「……変わったやつだ」

男は呟き、サラダを食べ始めた。

「れいおねーちゃん！」

ほら穴を出て数歩歩いたとき、突然横から声がした。あまりに唐突だったので、れいは怒鳴られでもしたかのように石のように固まった。

「どうしたの？」

「あ、諒斗君か……。びつくりしたあ」

「あれ、れいお姉ちゃんそれ何？」

近所の顔見知りである小学二年生の彼は、れいが提げているからつぽのコンビニ袋を見つけた。

「何にも入ってないけど、どうしたの？」

「え？ ああ、これね……」

まさか本当のことを言うわけにはいかない。必死で頭をフル回転させ、怪しまれるほどの間を作らず、れいは答えた。

「ほら穴の近くにね、ゴミがいっぱい捨てられてるの。もちろんお姉ちゃんだって、立入禁止だから穴の中には入ってないよ。でも人が近づかないと思って、あの辺はゴミだらけなの」

実際、ほら穴付近にはゴミが散乱している。れい自身も、時々拾って帰るのだ。

「そうなんだー。れいお姉ちゃんえらいね！」

「そう？ 諒斗君に言ってもらえると嬉しいなあ。さ、あたしも帰るから、一緒に帰ろっか」

「うん！」

草むらを抜け歩道に出ると、知らない男性が信号待ちをしていた。季節外れのキャンプ客だろうか、とれいは思ったが、男性は二人を

見つけると、気さくにあいさつをしてきた。

「こんにちは。ご兄弟ですか？」

「いえ、近所のお友達なんです。……あの、キャンプにいらしてるんですか？」

「この町の者です。と言っても、つい最近ですが」

れいの記憶では、最近家が建ったということは聞いていない。

「ああ、私、あそこの家の者なんです」

そう言っつて男性が指したのは、岩壁の奥にそびえる豪邸だった。

「え、あそこの……！　じゃあ、例の会社の社長だか誰だかっていうのは、あなたが？」

「そんなところです。社長じゃなくて、社長の息子ですけど」

「で、でも次期社長じゃないですか。そうですか、あそこの……」

「仕事の手伝いやらされて、あまり外に出られないんですよ。だから馴染めなくて」

れいは納得した。てつきり、人付き合いが嫌いな人間なのだと思っっていたからだ。

「豪邸の息子は、ここに溶け込めるよう努力してるって、町の人に言っつておいてもらえませんか。みんなよそ者を見る目で見てくるので」

「わかりました、ちゃんと言っつておきます」

困ったようにれいに頼んだ男性とは、歩道を渡った後に別れた。

帰り道でも、れいの頭の中はいつほら穴に行こうかという考えでいっぱいだった。

休日の朝、れいが着替えて一階へ降りようとしたとき、なにやら一階が騒がしいのに気付いた。大声で話しているわけではないが、せわしなく歩き回っている気配がしたのだ。

降りてみると、父も母もいつになく真面目な顔で、出かける用意をしている。

「お父さんお母さん、どうしたの？ どこか出かける予定なんかあったっけ」

まだ眠い目をこすりながられいが言うと、二人とも驚いたようにれいを見た。

「れい、お前は家にいるんだ。お父さんたちが帰ってくるまで、出かけたりするんじゃないぞ」

「な、何？ どうしちゃったの？ 何かあったの？」

すくみ上がるような剣幕でないにしろ、れいを心配させるには十分な焦りようだった。

二人は何も言わず、さつさと家を出ようとしている。

「ねえ！ なんで教えてくれないの？」

たまりかねたように、父が振り向く。

「れい、あれほど言ったのに、お前は……」

一瞬、理解できなかった。だがれいはすぐに思い当たった。

「お父さん……」

「隣の諒斗君が教えてくれたんだ。ほら穴の前の草むらで遊んでいたら、誰かが来るので隠れた。そしたらそれはれいお姉ちゃんだった。ほら穴の一つに入っただけで、しばらくしたら出て帰ったとそれに、コンビニの袋を提げて……」

見られていた、とれいは愕然とした。多分、あの日会った後、諒斗君は不思議がってあの付近で遊ぶようになったんだろう。それで、見られてしまった。

「何しに行くの、お父さんたち！」

「警察が来てはうるさいからな、みんなで今度こそ出て行ってもらうよう言いに行くんだ」

「あたしも行く！」

「だめだ、お前はいるんだ」

れいを家に残し、二人は足早に家を出て行った。父は、ほら穴の浮浪者に恐喝でもされて、食べ物を買わされていたと思っているのだから。

「違う……。何もやってない」  
れいは二階に駆け上がると、机から家の鍵を取り出し、鍵をかけるとほら穴へと走った。

## 第四話

れいがほら穴が見えるところまで到達したとき、すでにあの男のいたほら穴の周りには、人だかりができていた。入り口をふさぐようにではなく、まるで覗き込むように。

「町の人……ほとんど来たんだ」

息を切らしながらも、れいはまた走った。町の人たちの後ろにやつと着いても、皆ほら穴に注目していて、誰もれいが来たのに気付いていない。

「誰かいるんだろう！ すぐに出てくるんだ！」

誰かの声が、ほら穴に入ると大きく響いた。微動だにしない暗闇が揺れたのは、一分ほど経ってからだだった。

「あ……」

あの男だった。初めて陽光の下で見る男は、あの暗闇での生活せいかかなり細かった。そのため、身長もかなり高く見える。ジーンズ生地の長袖のジャケットは袖が捲くられ、全て薄汚れていた。ぼるぼるになってはいないものの、上着以上に男のズボンが汚れていた。白と思わしきスニーカーも、泥だらけだ。頭はぼさぼさの長髪だったが、顔ははっきり見えた。

「あんたか、家の娘を脅したのは」

れいの父の声だった。思わずそちらを見ると、見たこともない恐ろしい顔で、れいの父は男を睨んでいた。

「すまないが、俺は何も話を聞いていない。何の事を言っているのか、説明してもらいたいんだが」

「とぼけるな！ 自分でやったこともわかってないのか！」

「俺は迷惑をかけないよう、ほら穴からは一步も出ていない。それなのになぜ怒る」

「女の子が、あなたのところへ来てたでしょう。あれは娘なの。どうしてここを避けていた娘が、突然あなたのところに来るようになる」

ったの？」

今度は母だった。

「……ああ、あの女か。突然入ってきたんだ。それで何を思ったか、俺に食べ物を持って来るようになった」

「お前が命令したんだろう」

「俺は食料を持っていた。別にいらなかったのに、勝手に持って来るんだ」

「嘘をつけ！」

「違う！ お父さん違うよ！」

今にも男に掴みかかりそうな父の前に、れいは飛び出した。ほら穴の男をかばうように。

「れい！ 家にいると……」

「お父さん、どうして勝手にそんなこと言うの？ この人は何もしてない！ したのはあたし！」

殺気に近かった人ごみの雰囲気、弱まったようにれいは感じた。「あたし、つい興味がわいて入ったの、ここに。それでこの人に会って。この人は来なくていいって言ったんだけど、あたし心配で……。それで食べ物とか買って、この人に渡しに行ってたの。全部あたしがしたことなんだよ。だから、この人は何も、何もしてないのに……」

感情の高まりのせいか、れいはわけもなく泣き出した。

「……いいやつだ。……れはこういう……さかし……」

れいが涙を流していたせいか、それとも男が小さく微笑を見せながらうつむき、呟いたせいか、男の言葉は、れいの耳には途切れて聞こえた。

「あんだ……似てない？」

れいがお世話になっているコンビニの松木が、一步出て男の顔を覗き込み言った次の瞬間、空高くにまで響き渡りそうなクラクションが二度、続けて鳴った。

「な、なんだ！」

その場にいた浮浪者以外の人間は、皆後方の道路を振り向いた。漆黒のクラウンが、ゆっくりとこちらに脇腹を見せ、停止したところだった。

「どうしたんです？　こんなみなでお集まりになって」

運転席から出てきたのは、若い男性だった。スーツを着たその男に、れいは見覚えがあった。

「あ、あなたは」

「あれ、この前のお嬢さん。その後ろのは？」

社長の息子だと自称した男性は、れいにどけるとも言わずに、ほら穴の男を首をかしげて見ようとした。

「……あ、あんただ！　どこかで見たと思ったら」

松木の驚いたような声だった。松木は息子を見て、そしてほら穴の男を見た。

「この男の顔、この人と似てるんだよ！」

ほら穴の男を指しながら、息子に怒鳴り散らすように松木は叫んだ。周りがざわめき、そして松木の意見に同意する声が随所から上がった。それを見回し、小さくため息をつく、次期社長は喧騒に負けないような大きさの声で、言った。

「ま、出てきたって事は、見つけたんですね？　兄さん」

「ああ」

弟の言葉にしんとなったため、兄の言葉は小さいながらもはっきりと聞こえた。

「皆さん、僕に会った人は、僕が社長の息子だと言ってたと思います。だけど嘘だったんです、それ。確かに息子ではあるけれど、僕は次男。現に次期社長なのは、僕の兄である長男、つまり」

元次期社長は、故意に間をあけたようだった。

「そこにいる、浮浪者のふりしてる人です」

町人たちは一気に驚きの色に染め上がった。れいだけが事情を飲み込めておらず、ただ呆然とつっ立っていた。

「兄さんはね、本当に優しい人を探していたんだ。だからって、こ

ここまでやることないと思うんだけどね。街で知り合った女性が、よっぽどひどかったらしい」

「偽善で世話をしてくれていただけなら、ここでいい機会だとばかりに、追い出す側に転じるような女しか知らなかったんでな。まさかかばうとは考えていなかった」

暗闇で聞いた声とも、先ほどまでの無表情に近い顔ともかけ離れた、しかしどこか共通する声に、れいは浮浪者ということが架空なのを実感した。

「じゃ、決定かな」

「え、何が、ですか？」

次期社長を振り見ていたれいは、弟の唐突な声にまた体を戻した。「あなたが嫌じゃなければ、家に来てくれないかな。兄さんのお相手として」

「えっ……」

「外見を気にしないで、人を助けられるようなところに、兄さん惹かれたんだよ」

「何をしでかすかわからない浮浪者のところに通うのも、どうかと思うがな」

「兄さんが手出ししなかったから、彼女信じたんでしょ？」

しばし兄弟の話が流れ、れいは弟の言葉を理解することにした。

家、とは、やはりあの豪邸だろうか。相手、ということは……

「自分より他人のほうが心配だなんて言うやつが、いるとは思わなかったよ……」

その言葉が形になったように、れいの肩に手が置かれた。

「来てくれるか？」

「……あたしでよければ」

「そんな謙遜の言葉は初めて聞いたよ」

振り向いたれいが見た、男の初めての表情は、あの態度とは遠くかけ離れた優しい笑みに満ちていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8323p/>

---

ほら穴の彼

2010年12月31日10時55分発行